



## 殿さまの茶わん (6)

その後で、主人は店のものの全部を集めて、事のしだいを告げ、「殿さまのお茶わんを造るように命ぜられるなんて、こんな名誉のことはない。おまえがたも精いっぱい、これまでにない上等な品物を造ってくれなければならない。軽い、薄手のがいいとお役人さまも申されたが、陶器はそれがほんとうなんだ。」と、主人は、いろ



## 殿さまの茶わん (7)

---

いろいろのことを注意しました。

それから幾日かかかって、殿さまのお茶わんができあがりしました。また、いつかのお役人が、店頭へきました。

「殿さまの茶わんは、まだできないか。」と、役人はいいました。

「これでございます。」と、主人は、役人にお目にかけました。

それは、軽い、薄手の上等な茶

---



## 殿さまの茶わん (8)

---

わんでありました。茶わんの地は真っ白で、すきとおるようでございまして。そして、それに殿さまの御紋がついていました。

なるほど、これは上等の品だ。なかなかいい音がする。」とって、お役人は、茶わんを掌の上に乗せて、つめではじいて見ていました。

「もう、これより軽い、薄手には



## 殿さまの茶わん (9)

できないのでございます。」と、  
主人は、うやうやしく頭を下げて  
役人に申しました。

役人は、うなずいて、さっそく、  
その茶わんを御殿へ持参するよう  
に申しつけて帰られました。

主人は、羽織・はかまを着けて、  
茶わんをりっぱな箱の中に収めて、  
それをかかえて参上いたしました。

世間には、この町の有名な陶器





## 殿さまの茶わん（10）

---

店が、今度、殿さまのお茶わんを、  
念に念を入れて造ったという評判  
が起こったのであります。

お役人は、殿さまの前に、茶わ  
んをささげて、持ってまいりまし  
た。

つづく

